



# 「つながる」ことを大切に

高梨 智子

子どもたちと私たち教師の出会いが入園式が初めてではありません。それは、入園面接の時から、始まっています。面接では、十五分というわずかな時間の中で、一人ひとりと向き合い、最後に「待っているね」の言葉をおくります。この言葉の中には、子どもたちに「あなたのことを待つ

ているよ」「大丈夫、楽しいことがいっぱいあるよ」などのメッセージを込めています。さて、入園当初には、こんな姿があります。子どもたちを「○○ちゃんだね」と名前で呼ぶと、「何で知っているの?」と不思議そうに教師を見ます。隣にいる子どもも、じゃあ私は? という

ような表情で教師を見ます。同じように名前で呼ぶと、ニコニコ顔になります。このように教師は、子どもたちの名前を早く覚え、たくさん名前を呼ぶようにしています。それは、子どもが名前を呼ばれることで、教師に親しみをもつからです。『私を知っていてくれる』という思いが、自分の存在を、相手の中に感じるのだと思います。

また、涙が止まらない幼児に「ここを持っていてね」と教師の服のポケットをつかませると、泣きながらも、しっかりとポケットを握りしめ、その手が離れようものなら、追いかけて来て、またぎゅつとつかむのです。教師の両方のポケットに子どもをつかませながら保育室を歩くこともしばしばです。身体がつながっているということでは安心感をもつのです。

他にも、子どもたちの身体に触れ、スキンシップ

をすることを心がけています。登園時、挨拶しながら手を握ったり、遊んでいる時にも、そつと頭をなでたり、肩に触れたり、園庭に出る時に、手をつないで移動したりします。そして、降園時には、「また明日ね」という気持ちを込めて、ぎゅつと握手したり抱きしめたりして帰ります。人に触れる、触れられる安心感がここにもあります。

また、「○○しましょう」と口頭の指示だけで行動させようとするのはなく、カバンや帽子を教師と一緒に置いたり、「一緒に○○しよう」と遊びに誘ったりしています。子どもは、先生と一緒にすることで『皆の先生』ではなく『私だけの先生』という気持ちを感じるのです。そして『一緒』であることは子どもたちの『何だか嬉しい』そんな気持ちをしづめるのです。

このように教師は、様々な形で、まず、子ども



たちと『つながる』（幼児と関係をつくる）ことを心がけます。そのことが、幼稚園生活をスタートさせる上でまず第一に大切なことであると考えられるからです。初めて保護者から離れた子どもたちが、教師に対して、保護者と同じ気持ち（安心感）を感じて欲しいと考えています。

ほとんどの子どもたちが、このように教師がかかわっていくことで「幼稚園で楽しいな」という思いで過ごせるようになるのですが、もう少し深く、思いを読み取ってかかわっていかなければいけない子どもたちもいます。そのような事例をあげてみます。

事例1 「ママに会いたい！」—教師が自分と気持ちと同じであることへの安心感—

入園式の翌日。保護者と離れられずに、泣き

出したA子。保護者から預かり、教師が抱えて保育室に行き、何とか荷物の始末をしても、まだ泣き止まない。「ママに会いたい」「ママのお迎えまだ？」と言って泣き続けた。「そう、ママのことが好きなんだね。私も一緒。ママっていいよね。私もママに会いたくなっちゃったな」と大の大人が言う姿にA子はきよとんとした。その後も「ママもきつとそう思っつて、急いでお掃除しているんじゃないかな」などと声をかけ、大好きなママの話が続けた。

この事例のような姿は、入園式の翌日から必ず見られます。このような時には、気持ちを切り替えさせようとするのではなく「そうよね」と子どもも気持ちに共感したいと思っつています。そうすることで、子どもも、自分の気持ちを受け止めて

もらえたと安心するようです。いつも思うのは、子どもと向き合うのではなくて、子どもの隣で、一緒に語らう……そんな存在でありたいということです。

事例2 「僕ここで、考えてるから……」

—自分をわかってくれる人がいる安心感—

A男は保護者と一緒に保育室にやってきた。

「楽しそうだよ！ 遊んでおいで」と保護者は、何とか中に入れようと、声をかける。しかし、A男は、じっと中を見つめ「ぼくね、考えてるから……」と言って中には入ろうとしな。教師は「そうか……。じゃ、ここに座って考える？」と椅子を差し出した。すると保護者の顔を見上げながら、何とか腰掛けた。その日は、ドアの敷居を越えずに、廊下で座って中

遊ぶ友達の様子を見つめていた。

この事例からは、「考えているから……」という言葉と、その必死な表情に、初めての場に緊張しているA男の気持ちが伝わってきました。母親が自分を中に入れようとしている気持ちをキャッチし、でもそれに応えられない自分がいる。子どもも子どもなりに心の中で葛藤しているのです。そんな胸の内を察し「大丈夫わかっているよ」と、頑張った小さな一步を受け止めていきたいと考えています。





### 事例3 「〇〇組で遊びたい」

―居場所を保障されることで感じる安心感―

B男、C男、D男の三人は入園前から仲良しだったが、学級編制では、B男だけが違うクラスになってしまった。B男は自分の保育室では、何をして遊んでいいかわからず、戸惑いを見せていたが、しばらくして「〇〇組で遊びたい！」とC男D男のクラスに行き、三人になると笑顔で遊び始めた。

この事例では、保護者から離れた幼児にとつて、仲良しの友達が心の支えのひとつであると感じました。そこで、自分のクラスに入るといふ形を急がずに、「〇〇組で遊んでいるんだね。じゃ、集まりになったら迎えに来るね」と、離れていても、教師は、あなたのことを思っているよ

という気持ちを伝えながら、その姿は認めていきました。

他にも、いろいろな理由で、部屋に入れなかったり、いられなかつたりする場合があります。そんな時には他の教師と連携をとり、その子が心地よくいられる場で過ごす時間を大切にしています。

このように、子どもたちの気持ちを受け止め『つながり』ながら、同時に大切なのは『教師と保護者もつながる』ということだと思います。事例1では、保護者の方に対しては、泣いているわが子を思い帰宅する気持ちを受け止め、子どもの姿を、保護者の方が安心できるように具体的に伝えるようにしました。このような場合は、無理に親子を離さずに、子どもが自分から「お母さんいいよ」と離れられるまで、保護者の方の思いも伺いながら、保育室に一緒に入っていたくことも

あります。事例2では、廊下から、部屋の中に場を移せたことを、教師と保護者が、共に喜び合えるようにしました。事例3では、保護者の方にも、本人の思いを伝え、心地よくいられる場でも、ごす時間を積み重ね、幼稚園という場への安心感をもたせていきたいと思います。子どもたちが幼稚園で過ごす時間は、保護者の方には見ることができません。その間の子どもたちの変容を、見ることができるのは、共にいる私たち教師だけです。そのことを心にとめ、園内での子どもたちの様々な姿を記録に取り、保護者の方に伝えていくよう心がけています。また、担任だけでなく、園全体で、子どもたちと保護者の方を受け止めていかれるよう、全職員で共通理解しながら保護者の方との連携を図っています。

近年は、自治体の実施する未就園児保育などの

幼稚園開放によって、親子で幼稚園に登園し、共に時間を過ごす機会が増えました。長い期間をかけて、幼稚園という場になれば、家庭から幼稚園への段差を緩やかに越え、入園を迎えることができるようになってきたと感じています。しかし、そうした経験を踏まずに、入園してくる子どもと保護者の方もいます。様々な状況の親子がやってくることを念頭に置き、「初めてなのだから、できなくて当たり前」という気持ちを教師自身で忘れずにいたいと思います。子どもたちが見せる行動の理由を「なぜなんだろう?」「どんな気持ちなのだろう?」とわかろうとする気持ちを持ち続けたい……何よりも、子どもたち自身が『自分から、歩き出す』そんな力をもつことができるように、気持ちを支えていくことが教師の役割であると思っています。

(浦安市立神明幼稚園)